

s i g n a l

For adult only

mechi

その方と初めてお会いしたのは、私が乗務するアヴァロン号3回目の航海時、目的地まであと50年といった所でした。まだ乗客の皆様は冬眠されているはずで、まずありえないのですが「予定より随分早くお目覚めになられたのだな」と思つて接客にあたつたのをよく覚えています。（お陰様で私も予定より随分と早い起動となつたので。）

ラウンジに入つてきたその方は、私を見つけると、子供のように目を輝かせてこちらに駆け寄つてきました。茶髪の長身細身、焦茶のスーツを着た若い男性ですが、コンバースを履いているので少し変わつてゐるなど思ひました。

彼はカウンターに掛けた頬杖をつくと、私を覗いてこう言いました。

「ねえ君、君の一番のオススメをくれる？」
「いらっしゃいませ、どれもがお勧めですが…今はどんなんご気分でしようか？」
「…そうだな、ちょっとへこんでる」

小首を傾げ、ニコニコと答えた彼はへこんでいるように見えませんでしたが、私は「では」とスコッチをロックでお出ししました。

「ありがとうございます」

彼は白い歯を見せて笑い、グラスに口をつけると大きな目を細めて小さく息をつきました。

「メーカーズマーク、やっぱりうまいね、懐かしいよ…」

「英国のご出身ですか？」

「ううん、出身はガリフレイ」

聞いたことのない国名でしたが、あまり気にせず返しました。

「それは失礼いたしました…とにかく、60年眠られていましたらお久しぶりでしょう」

「ううん、飲んだのは半年くらい前かな…2000年代のロンドンで」

「さようですか…」

不思議なことを言う方だと思いましたが、冗談を言うのがお好きなのかからかつているのだと思い、あまり